

## 事項五 日米外交関係雑件

一五一 一月十五日 在ロス・アンゼルス大橋領事ヨリ  
幣原外務大臣宛

日米関係問題ヲ中心トスルハーストトノ会談

報告ノ件

機密公第二一号

大正十五年一月十五日

(一月十三日接受)

在ロス・アンゼルス

領事 大橋 忠一 (印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

「ハースト」ノ談片報告ノ件

「ハースト」新聞ハ過去ニ於テ殆ト毎日ノ如ク日米戦争煽動ノ記事論説ヲ掲ケ布畦日系市民渡米ニ関シテモ毒々シキ排日の筆法ヲ用ヒタル處最近ニ至リ右様ノ排日記事著シク減少シ眞偽ハ勿論不明ナルモ「ハースト」系諸新聞ハ紐育本部ヨリ日米戦争記事差止メノ命令ニ接シタリトノ噂ヲ耳ニシタルコトアリ兎ニ角最近「ハースト」新聞ノ態度幾分緩和シタル事実ニ興味ヲ感シ旧臘以来当地「ホテル」ニ滞

貴下自ラ訪問スルコト不可能ナラハ両三年前貴下カ多数ノ上院議員ヲ露西亞ニ送リタル如ク貴下ノ信頼スル有力者ヲ

東洋ニ派遣シ詳細ニ真相ヲ研究セシメテハ如何」ト述ヘタル處「夫レハ極メテ適當ノ思忖ナリ適當ノ機ヲ見テ实行シタシ」ト答ヘ「今後モ意見交換ノ為メ訪ネラレタシ」ト懇

懃ナル態度ヲ示シタリ

右ハ排日巨頭ノ言トシテ何処迄真ヲ措キ得ヘキヤ疑問ナル

モ何等御参考迄ニ報告ス

本信写送付先 在米大使

(欄外記入)

「ハースト」ヲ排日又ハ排英主義者ト見ルハ皮相ノ見ナリ彼ノ根本的新聞政策ハ當面ノ世間ノ最モ興味ヲ感スル「トピック」ヲ看破シ之ヲ誇大ニ報道論議セシムルニ在リ故ニ人気ヲ呼ハサルニ至ル問題ハ之ヲ棄テ他ノ人気ノ種子ニ転スルコトノ敏速ナルコト他ノ保守的新聞ノ及フ所ニアラス是レ彼カ排英ヨリ転シテ排日論ヲ高潮シ今ヤ一時排日ヨリ他ノ好題目ニ転セントスル所以、之ヲ以テ彼カ排日主義緩和セラレタルカ如キ觀察ヲ為スハ戒心ヲ要スヘシ  
右ハ小生カ昨年「ハースト」系新聞ノ一重鎮ヨリ聽得タル告白也(若杉)

一五二 一月二十九日 在サン・フランシスコ武富總領事ヨリ  
幣原外務大臣宛

排日家トノ意見交換ヲ目的トスルギューリック

ク博士ノ加州出張計画ニ關スル件

機密公第五九号

(一月二十三日接受)

大正十五年一月二十九日

在桑港

総領事 武富 敏彦 (印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

「ギューリック」博士ノ加州出張計画ニ關スル件

排日家巨頭「マクラッチー」ヲ事實上ノ中心トスル当地

Joint Immigration Committee ハ曰「ギューリック」

博士ヲ中心トスル東部ノ National Committee of American Japanese Relations は対抗スルヲ此レ事トスルモノノ如ク今日ノ所当地方ニ於ケル排日の「アジテーション」ハ要スルニ「マクラッチー」対「ギューリック」ノ論争トモ観察セラル次第ナル所予テ「ギューリック」博士ニハ身自ラ加州方面ニ出張シ親シク「マクラッチー」其他排日家トモ意見交換ヲ為シ更ニ当地方ノ教会連盟關係者トモ会談ノ

上当地方ニ於ケル Campaign of Education 計画ノ協議ヲ行ヒタキ意向アリ羅府ノGeorge Gleasonハ旧臘「マクラッサー」ニ対シ「ギューリック」博士トノ会談ヲ慇懃シタルニ對シ「マ」ハ別紙写ノ如キ回答ヲ全米各所ニ配布シテ排日的宣伝ノ用ニ供スルニ至リ兩者ノ会談ノ如キハ到底諒解ヲ遂クルカ如キ望ナキノミナラス却テ「マ」ニ利用セラレテ所期ノ目的ニ逆行スルノ結果ヲ來ス虞多大ナルヲ察セラルル次第ナル所本年ニ入リテ更ニ「ギューリック」博士ハ「マ」トノ会談ハ断念シタルモ所謂 Campaign of Education 計画ヲ当地方教会連盟側ト打合ノ為加州方面出張ノ意向ヲ当地方關係者ニ通シ来リタル趣ニテ例ノ「ガイ」博士ハ之ヲ聞込ミ其果シテ当地方ノ実情トシテ時機ニ適シタルヤ否ヤニ付当地商業會議所ノ日米關係委員其他ニ相談シタルニ何レモ徒ラニ排日派ノ対抗運動ヲ誘発スルニ終ルヘキヲ憂慮スルニ一致シサリトテ「ギ」博士ノ来加ヲ進ムテ阻止スルモ面白カラストテ頗ル難色アリ又当地方ノ教会連盟側ニテモ今日ノ所何等此種「キャンペーン」ヲ行フ意思モ用意モ之ナキ由ナレハ「ギ」博士ノ来加ハ同連盟側ヨリ考フルモ時期ヲ得

タルモノニアラサルヘシトノ意見ヲ具シ小官ニ処置方相談シ来リタルヲ以テ小官ハ自ラ何等ノ意見ヲ申送ル位置ニアラサルモ「ガイ」博士ニ於テ同博士一箇ノ意見思付トシテ前記当地方ノ実情ヲ記スト共ニ本年ハ加州知事上院議員等ノ改選期ニ当リ選舉運動ニ利用セラルル虞アルコトヲ説明シ加州出張ハ見合ハスヲ寧ロ得策トスヘキ旨ヲ申送ルコトトシテハ如何ト「サジェスト」シ置タルカ最近「ガイ」博士ノ受ケタル「ギ」博士ヨリノ回答ニ依レハ同博士ハ加州出張ヲ當分見合セタル趣ナリ

右何等御参考迄報告ス

本信写送付先 在米大使、在紐育總領事、在羅府領事  
編註 別紙写省略

一五三 二月十八日 在ホノルル青木總領事ヨリ  
幣原外務大臣宛

幣原外相ノ帝国議会ニ於ケル米国移民法ニ閲  
スル答弁ニ対スル當地新聞論評報告ノ件

公第七一號

(三月九日接受)

大正十五年二月十八日

在ホノルル

撤廢スルカ如キコトハ絶対ニナカルヘク又近キ将来ニ於テ米國議会カ之ヲ撤廢スルカ如キ事モ殆ト想像出来ヌ事テアル  
移民法ヲ通過シタ米國議会ハ之ヲ其儘ニシテ置クコトニ満足シテ居ル米國議会カ慥カニ好マス又許シタクナイ事ハ惡感情ヲ伴フ一九二四年ノ論争ヲ再ヒ繰返スコトテアル  
一九二四年ノ移民法ハ順調ニ実施セラレテ居ル排斥条項モ有効テアル移民法ハ当初ノ目的ヲ遂行シツツアルノテアル合衆國ニ於ケル排斥条項撤廢ノ主ナル運動ハ小部類ノ人士カ起シ其活動カ大団体ヲ動カシテ居ルノテアル此ノ少數人士ハギューリック博士及前検事総長ウイカーシャムニ率イラレ彼等ハ全米教會會議ノ如キ大団体ヲ通シテ活動シテ居ル

此ノ大団体ハギューリック博士及ウイカーシャム氏カ提案指導スル通リ決議文ヲ通過シテ居ル吾人ハ此ニ紳士ノ善意ヲ非難セントスルモノテモナケレハ全米教會會議カ其ノ自ラ信セサル決議文ヲ通過スルモノト諷スルノテモナイ一九二四年ニハ多數ノ米國人力排斥条項ニ強硬ニ反対シシ今尚ホ明ニ予言シテハ居ナイ目下開会中ノ米國議会カ此ノ条項ヲテアロウト云フコトヲ期待シテ居ル」  
右ハ一九二四年制定移民法中ノ所謂排斥条項即チ米國市民トナル資格ナキ外國移民ノ入國禁止条項ヲ指スモノテアル幣原男ノ所言ハ日本議会ニ於ケル質問者ニハ満足ヲ与フルカモ知レナイ然シ男ハ此ノ排斥条項ハ撤廢サルヘキコトヲ明ニ予言シテハ居ナイ目下開会中ノ米國議会カ此ノ条項ヲ

ユーリック、ウイカーシャム両君ナカリセハ排斥条項ハ余程以前ニ米国ノ問題タラサルニ至ソタテアロウト云フ明力ナ事実ヲ強調セントスルモノテアル米国人ハ此問題ハ既ニ歴史ニ繰入レテ居タ筈テアル

吾人ハ既ニギューリック、ウイカーシャム一派ノ排斥条項撤廃運動ハ賢明テナイト云フ意見ヲ述ヘタ此運動ハ議会ヲ動カス途ヲ知ツテ居ル加州ノ排日家ヲ刺激シ一種ノ復讐的行為ニ出テシムルニ過キサルモノテアル

此ノ運動ハ又一部ノ日本人ヲシテ合衆国内ニモ排斥条項ノ撤廃ヲ断然要求シツツアル米国市民ノ大団体アリトノ思想ヲ抱カシムルモノテアルカスル要求ヲ為シ居ル斯ル團体ハ決シテナイノテアル

一五四 五月十日 駐日米國大使マクヴェイ  
若 楠 総 理 大 臣 会 談

#### 日米關係ニ関スル新駐日大使ト若楳内閣總理

##### 大臣トノ会談要領

米國大使ト若楳總理大臣トノ会見要領

本月十日前十一時在京米國大使「マクヴェイ」氏新任挨拶ノ為通訳トシテ「ネヴィル」總領事ヲ帶同シ若楳總理大臣トノ会見ハ恰モ本國ニ於ケル大統領ト会見

ナク率直ニ懇談ヲ為シ密接ナル接触ヲ保タムコトヲ希望スルヲ以テ首相ノ御好意ニ甘へ更ニ初夏ノ頃例へハ

六月末頃迄ニ再応会見ノ榮ヲ得タキ所御都合如何ナルヤ

総理大臣 幣原外務大臣ハ前總理大臣ニ於テモ信用篤カリシカ自分ニ於テモ同様信賴シ居リ又其ノ外交方針ハ全

然自分ト同意見ニテ其ノ淡懶ニシテ直截ナル措置振モ自分ノ贊同スル所ナルヲ以テ宜シク同大臣ト隔意ナク接觸サレンコトヲ希望ス自分ニ於テモ出来ル丈ヶ接觸ノ機会ヲ得ンコトヲ期待ス

大使 本使着任以来外務大臣其ノ他ヨリ非常ナル好意ニ預

リ殊ニ先日宮中ニ於テ皇后陛下並ニ摄政宮殿下ヨリ午餐ノ御饗心ヲ辱ウシ自分等夫妻共感激シ居ル次第ナル

カスクノ如キ各方面ノ好意ニヨリ自分ノ使命ニ就キ多大ノ勇氣ヲ鼓舞セラレタルヲ感スルモノニシテ何等カノ方法ニヨリ日米間ノ関係ヲ一層良好 ("better terms") ナラシメン為努力シ度考ナルニ付首相ニ於テ

モ驚ト御諒承ヲ願ヒ度シ

臣ヲ來訪、依頼ニ依リ若杉外務書記官通訳ヲ為シ「ネヴィル」總領事ハ單ニ陪席ス、会見ノ要領左ノ如シ

總理大臣 御着任ノ當時才自ニ掛ルヲ得サリシヲ以テ「ホテル」ニ名刺ヲ残シ敬意ヲ表シタル次第ナルカ本日態々御來訪ニ接シ恐悦ニ堪ヘス

大使 予ハ着任後前首相ニ会見ノ約束アリタルモ不幸ニシテ其ノ薨去ニヨリ遂ニ果ササリシ處今日首相ニ拝眉ノ榮ヲ得タルハ頗ル欣快トスル所ニシテ自分カ特ニ首相ニ会見スルコトヲ光榮トスル所以ハ米國ニ於テハ總理大臣ナルモノ無ク之ニ該当スルモノハ即チ大統領ニシテ總理大臣トノ会見ハ恰モ本國ニ於ケル大統領ト会見スルノ感アルヲ以テナリ

總理大臣 御鄭重ナル御挨拶ニ対シ感謝スルト共ニ恐縮ニ堪ヘス自分モ平常外交團各位ト会晤ヲ欲シ居ルモ御承知ノ如ク日常ノ些事ニ逐ハレテ意ノ如クナラサルハ遺憾ナルカ今後ハ出來ル丈ヶ会談ノ機会ヲ得タク考へ居ル次第ナリ

大使 御承知ノ如ク自分ハ着任以來外務大臣ト極メテ腹藏敬愛ノ念ヲ有シタリシカ近來ハスクノ如キ好感カ幾分減シタルハ頗ル遺憾ナリ併シ乍ラ我カ皇室ニ於カセラレテハ終始米國ニ對スル親愛ノ御希望ヲ有セラレ依然トシテ此ノ親善關係ヲ保持セラレ度思召ナルヲ以テ日本間ノ關係改善ニ就テハ我カ方ニ於テモ充分努力スルト共ニ貴方ニ於テモ宜シク御配慮アランコトヲ希望ス

日本皇室ノ恩召ト同様ニシテ両氏共例ノ法案ニ反対ナリシハ御承知ノ通ナリ故ニ自分トシテハ全力ヲ擧ケテコノ日米間ノ関係ヲ從前ノ如ク良好ナラシムルコトニ努力スル考ニテ現ニ渋沢子爵及金子子爵トモ本問題ノ解決案ニ付考慮シツツアル次第ニシテ自分ハ在任中専心本問題ノ解決ニ從事シタキ覺悟ナルカ万在一任中遂行シ難キ場合ニハ帰國後ニ於テモ本問題ノ解決ニ私生涯ヲ投シ度所存ナリ金子子爵ハ該法案ノ通過ニ對シ日本本人中尤モ憤慨セル人ニシテ其ノ為日米協会々長ヲモ辞シタル趣ナレハ同子爵ヲ満足セシムルカ如キ解決案

ハ必スヤ日本国民全体ヲ満足セシムヘシト信ス

総理大臣 金子子爵ハ熱心ナル米国ノ友人ニシテ又渋沢子

爵ハ日米間ノ友好關係促進ヲ畢生ノ事業トスル人士ナ

レハ両子爵ハ能ク日本國民ノ意向ヲ了解シ居ラルモ

ノト思ハル尤モ日本國民中ニモ種々ノ意見ヲ有スル者

アレハ一々日本國民ノ意向ヲ代表スルモノトハ謂フヲ

得サルモ両子爵ノ如キハ能ク國民ノ意向ヲ承知シ居ラ

ルルヲ以テ宜シク其ノ説ク所ヲ含味セラレンコトヲ希

望ス只ダ茲ニ特ニ御注意ヲ煩シ度キハ日本人ハ極メテ

体面ヲ重ンスル國民ナルコト是ナリ故ニ本問題ノ解決

ニ当リテモ此ノ点ニ付充分御考慮ヲ要スヘク苟モ体面

ヲ傷クルカ如キコトハ避ケサル可カラス免ニ角御開示

ノ如ク大使カ本問題ノ解決ニ御努力ノ次第ハ大ニ諒ト

スル處ニシテ此上トモ充分御努力アランコトヲ希望ス

大使 本日ハ懇篤ナル談話ヲ交フルノ榮ヲ得テ本懐ニ堪ヘ

ス尚今後トモ屢々斯クノ如キ機会ヲ得シコトヲ望ム本

日ノ會見ハ自分カ先年墨西哥ニ於テ大統領「ヂアス」

氏トノ會見ヲ想起セシム「ヂアス」大統領ハ英語ヲ解

スルニ拘ラス通訳ヲ介シテ會談セラレタルカ首相モ亦

### ビニ之ニ対スル駁論報告ノ件

普通第一六六号 (六月二十四日接受)

大正十五年六月四日

在紐育

外務大臣男爵 幣原 嘉重郎殿

「フォーラム」誌上ニ於ケル日米戰爭論三閥スル件

月刊雜誌「フォーラム」(Forum)六月号ハ「日本トノ戰

争ハ可能ナリヤ」ナル題下ニ世界大戰中英國參謀總長タ

リシ「サー・フレデリック・モーリス」(Sir Frederick Morris)ノ不可能論及昨年「大太平洋戰」(The Great Pacific War)ヲ著シテ日米戰爭ヲ予言シタル「ヘクター・

シー・バイウォータ」(Hector C. Bywater)ノ不可能論ニ對スル駁論ヲ掲載シタルカ右高津官補ヲシテ要訳セシメ何等御参考迄本誌切抜相添茲ニ報告ス

本信写送付先 在米、英大使

〔〕「サー・フレデリック・モーリス」ノ日米戰爭ハ起リ得

ナイト云フ意見

五 日米外交關係雑件 一五五

同様ノ感アリ蓋シ通訳ヲ用ヒラレタルハ御回答ニ熱慮

ノ余裕ヲ示サレタル便法トシテ感服セリ云々

総理大臣 自分ニシテ若シ大使ノ御説ノ如ク「ヂアス」大

統領ノ如ク真ニ外国语ニ通スルニ於テハ通訳ヲ用ヒル

ノ要ナカルヘキモ自分ハ英語ヲ能クセサルコト仏語ヨ

リモ更ニ甚シキコトハ先日(徳川日米協議會長主催レセ

リショニニ於テ)大使夫人トノ談話ノ際ニモ充分御承

知ノ通ナレハ大使ノ所謂「ヂアス」大統領トノ比喩ハ

自分ノ敢テ当ラサル所也云々

(大正十五年五月十日若杉書記官述)

(欄外記入)

「十日午後マクヴェー大使ト会談ノ節同大使カ金子、渋沢両

子爵ト予テ談合ノコトヲ若櫻首相ニ述ヘタルハ米國移民法改

正ノ件ヲ意味セルニ非ス同法改正ハ同大使ノ企て得ルコトニ

非ス又關係シ得ヘキコトニモ非ス移民法改正問題以外ニ於テ

何カ日米親交ノ基礎ヲ發見シ得サルヤラ考量中ナリトノ意味

ナリト説明セリ(幣原)

一五五 六月四日 在ニュー・ヨーク斎藤總領事ヨリ  
幣原外務大臣宛

「フォーラム紙上ニ於ケル日米戰爭不可能論並

若シ日米戰爭カ起リ得ルトシタラ夫ハ日本カ支那ノ事ニ閑シテ米国ニ対シ攻勢的態度ニ出タ場合丈ニアラウ然ルニ四個國條約ノ精神ハ支那ニ閑スル紛議ヲモ四ヶ國間ノ會議ニ付シテ調整スルニ在ルカ故ニ日本モ右調整ヲ無視スル訳ニハ行カヌテアラウ然ルニ若シ日本カ右調整ヲ無視シテ米國ニ対シ攻勢ニ出タトシタラドウ成ルカ海軍條約第十九条ハ日英米三国ノ築城及海軍根拠地ノ現状維持ヲ規定シテ居ルカ故ニ今日日米兩國海軍根拠地ハ三千三百哩ノ遠距離ニ在ル其ノ結果ドチラノ海軍モ一擊ヲ以テ敵ノ主力ヲ破碎スル事ハ出來ス戰争ハ勢ヒ持久戦ト成リ補充能力如何ニ因ツテ勝敗ノ決ハ定マル所テ更ニ補充能力ハ製造力ト原料ノ多寡ニ因テ定ルノテアルカ海戰ニ最必要ナ材料ハ鉄テアル所カ日本ニハ之力極メテ乏シイソシテ今日日本ニ鉄ヲ供給シ得ル國ハ世界中英國ノミナノテアルカ前述ノ如ク日本カ四國會議ノ調整ヲ無視シテ戰争手段ニ出タ以上英國カ日本ニ鉄ヲ供給シテ之ヲ助ケルト云フ事ハ有リ得ナイ事情右ノ如クテアルカラ日本カ米国ニ対シテ戰争ヲ仕掛クト云フ事ハ決シテナイト断シナケレハナラズ

〔〕「サー・フレデリック・モーリス」ノ意見ニ対スル「バ

イウォーター」ノ反駁

サクラメント・ビー紙上ニ現レタル英人ノ日  
米戦争説ニ関スル論評報告ノ件

一七二

原料ノ多寡ニ因ツテ戦争ノ勝敗カ定ル様ニ説ク者カアルカ  
之ハ必シモ真理テハナイ其ノ適切ナ反証ハ日露戦争テア

ル然ラハ何故アノ豊富ナ原料ヲ持ツタ露国ハ原料ノ極メテ  
貧弱ナ日本ニ負ケタカト云フト露国ハ原料ノ所在地カラ遙

カ遠イ地点テ戦ハネナラカソタノニ反シ日本ハ自國領  
土ト云ツテモ良イ所テ戦フ事カ出来タカラテアル所テ若シ

日米戦争カ起ツタシタラ恰度日露戦争ノ時ノ様ナ事情ノ  
下テ米国ハ戦ハサルヲ得ヌテアラウ即チ戦争突発スルヤ日

本ハ比律賓ト「グアム」ヲ占領シテ西太平洋ノ制海權ヲ確

立シ徐ニ米艦隊ノ来攻ヲ待ツテ之ヲ擊破セントスルテアラ  
ウ然ルニ米艦隊カ遠ク出テ之ノ既ニ確立サレタ西太平洋

ニ於ケル日本ノ制海權ヲ打破シテ日本國土ヲ荒掠シ以テ敵  
ヲ屈服サセルト云フ事ハ至難ノ業ト云ハネナラヌ斯ク觀

來レバ日本カ其ノ原料不足ノ故ヲ以テ容易ニ米国ニ破ラル  
ルトハ考ヘラレヌ從テ日米戦争起リ得スト云フ事ハ出来ナ  
イ訳デアル

一五六 六月十一日 在サン・フランシスコ武富總領事ヨリ  
幣原外務大臣宛

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿  
英人ノ日米戦争説ニ関スル「ビー」紙  
論評報告ノ件

総領事 武富 敏彦（印）

米国評論雑誌「Forum」六月号掲載ノ前英國陸軍參謀總長  
「サー・フレデリック・マリース」卿ト「ヘクター・バイ  
ウォーター」トノ日米戦争能否論ニ対シ「サクラメント・  
ビー」紙ハ六月一日ノ社説欄ニ於テ大体左ノ如キ論評ヲ試  
ミタ

「加州ニ居ル吾々ノ眼ニハ『バイウォーター』ノ議論カ寧  
ロ正確ニ近イモノト見エル日本ハ一見平和ヲ希望スル者ノ  
如ク裝テハ居ルカ其実内心ハ未タ「サムライノ魂」テ満々テ  
居ル若シ日本カ千九百四年ニ『ロシヤ』ニ対シテ宣戰シタ  
ミタ  
當時ノ様ナ心理狀態ニナツタシタラ東洋ニ於ケル米国ノ

野心ハ日本ノ平和安寧ヲ攪乱スルモノテアルトナシ直チニ  
自負心ノ強イ米国ヲ極東ヨリ驅逐スル事ニ努ムルニ相違無  
イ其故吾人ハ先太平洋沿岸及布哇ノ防備ヲ堅メ又日本ニ匹  
敵スル丈ノ飛行機ヲ作製シテ万一一ノ場合ニ備ヘルノカ平和  
ヲ保障シ得ル唯一ノ途テアルト思フ」

右何等御参考迄報告ス

本信写送付先 在米大使

一五七 八月二十八日 在米國松平大使ヨリ  
幣原外務大臣宛

日米戦争説ト英國ノ立場ニ関スルバイウォーター  
ターノ論説報告ノ件

公第六二五号

大正十五年八月二十八日

在米

特命全權大使 松平 恒雄（印）

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

日米戦争説ト英國ノ立場ニ関スル「バイウォーター」

ノ論説報告ノ件

日米戦争ノ能否ニ付テハ從來屢々報告シタル通或方面ニ於

公第三三九号

（六月三十日接受）

大正十五年六月十一日

在桑港

總領事 武富 敏彦（印）

米国評論雑誌「Forum」六月号掲載ノ前英國陸軍參謀總長  
「サー・フレデリック・マリース」卿ト「ヘクター・バイ  
ウォーター」トノ日米戦争能否論ニ対シ「サクラメント・  
ビー」紙ハ六月一日ノ社説欄ニ於テ大体左ノ如キ論評ヲ試  
ミタ

「加州ニ居ル吾々ノ眼ニハ『バイウォーター』ノ議論カ寧  
ロ正確ニ近イモノト見エル日本ハ一見平和ヲ希望スル者ノ  
如ク裝テハ居ルカ其実内心ハ未タ「サムライノ魂」テ満々テ  
居ル若シ日本カ千九百四年ニ『ロシヤ』ニ対シテ宣戰シタ  
ミタ  
當時ノ様ナ心理狀態ニナツタシタラ東洋ニ於ケル米国ノ

テ今猶相当ノ興味ヲ以テ論議セラレ居ル處本月十三日刊行  
「バルチモア・サン」紙ハ「バイウォーター」ノ執筆ニ  
係ル「英國ハ日米間ノ平和ヲ熱望ス」トノ論文ヲ掲載シタ  
ルカ其要旨左ノ如シ  
上海ニ於ケル日本政府機關紙ハ此ノ著書ヲ以テ日米戦争ヲ  
釀成シ其間英國ハ軍需品供給ニ依リ巨利ヲ占メムトスルノ  
ミナラス戦争ノ結果両国ノ疲弊ニ乘シ支那ノ貿易及開発ヲ  
独占セムトスル目的ヲ有スルモノナリトスルモ英國ハ日米  
戦争ニ依リ何等ノ利益ヲ受クルモノニ非スシテ却テ不利益  
ヲ蒙ルモノナリ若シ米国ニシテ勝タンカ英國ハ米國ノ為極  
東貿易場裡ヨリ驅逐セラル可ク且又米國カ支那ニ於ケル政  
治經濟上ノ利權ヲ獲得スルハ想像スルニ難カラス又若シ日  
本ノ勝利ニ帰センカ一層大ナル不利益ヲ齎ラシ支那ノ門戸  
ハ閉鎖セラレ歐州貿易策ハ大ナル損失ヲ受ク可ク大亞細亞  
主義ハ實行セラレ現在英國統治下ノ東洋植民地ハ動搖スル  
ニ至ル可シ由來所謂日米戦争論ナルモノハ日本側ヨリ出ツ  
ルモノニシテ決シテ英國著述家ノ創造セルモノニ非ス例ヘ  
ハ佐藤中将ハ「日米戦フ可キカ」ヲ著ハシ川島清次郎氏ハ  
雑誌内觀ニ於テ米國ハ日本ノ自由植民政策ヲ牽制シ其ノ存

在ヲ危殆ナラシメタルヲ以テ日本ハ同國ト輪轍ヲ決スルノ要アリテ日米戦争ハ神ノ摺理ナリト論シ五月二十六、二十七両日ノ「ジャパン・アドバタイザ」紙ハ秋山定輔氏談話トシテ氏カ日米戦争ヲ以テ日本ニ対スル下剤乃至刺戟剤ト看做シ居ル旨ヲ報道セリ而シテ英國著作家ハ米国ノ勝利ヲ確信シ日本ハ軍事上敗北スルノミナラス其社会及経済組織ハ倒壊シ遂ニ強国ノ班ニ列スルヲ得サル可シト信シ居ル處日本著述家ハ反之若シ日本ニシテ猶予ナク米国ニ一撃ヲ与ヘ得ムカ日本ハ必ス勝利ヲ得可ク米国ノ対日經濟封鎖ノ如キハ効果ナシトス

要之英國カ日米戦争ヲ助長スルト云フカ如キハ欺誣ノ甚シキモノニシテ英國ハ極東ノ平和ヲ希フモノナリ尤モ現在日米關係ヲ危殆ナラシムルカ如キ問題存セス然カモ日本ハ戰闘能力無ク米国亦戰闘ノ意志ヲ有セサルモ日米戦争勃発セムカ延テハ人種鬭争ヲ誘発シ英國ノ東洋植民地統治ヲ動搖セシムル結果ヲ招致スヘク之ニ比スレハ軍需品供給ニ依ル利益ノ如キハ言フニ足ラサルナリ云々

右新聞記事写添付報告ス

編註 右新聞記事写省略

## 事項六 力ナダニ於ケル日本人移民制限問題

一五八 三月二十四日 在オタワ松永總領事ヨリ  
幣原外務大臣宛(電報)

連邦議会ニ排日決議案提出サレタル旨報告ノ  
件

(三月二十五日接受)

B・C州出身保守党代議士 Barber へ二十四日左ノ決議ヲ呈示セリ

東洋人ノ加奈陀特ニB・C州侵入ハ數年来増加シ来リ太平洋岸ニ於テ「アングロサクソン」ノ生活ヲ脅シ居ルコト彼等ノ生活標準ハ彼等ト産業上競争ヲ不可能ナラシムルコト白人特ニ帰化人中ニ多數失業者アルコト紳士協約ナル移民制限政策ノ下ニ日本人ノ入國数ハ確実ニ増加シ居ルコト一九二五年中日本人ハ男一九二女一六九小兒五〇入國セルコト一九二一年ヨリ一九二四年迄ニB・C州ニ於テ二六八〇日本人小兒出生セリ及一九二三年ヨリ一九二五年迄ニB・C州公立学校就学白人児童数ハ二「ペーセント」三分ノ一ノ增加ナルニ日本人児童数ハ七十「ペーセント」増加セル

ト以上ノ事実ニ鑑ミ東洋人ノ移民及此ノ急速ナル増加ハ特ニ太平洋岸ノ生活状態及國家全般ノ将来ニ重大ナル脅威トナリツツアルヲ以テ政府ハ今後此ノ種移民ノ絶対排斥(Exclusion of future immigration of this type)ヲ確保スル見地ヲ以テ即刻行動ヲ取ルヘシ

晚香坡へ転電シ「シカガ」英へ暗送セリ

(参考)

三月二十四日提出「ベーベー」決議案

(不明) Votes and Proceedings, No. 44, Mar. 22, 1926.

Mr. Barber—On Wednesday next—Proposed Reso-

lution—Whereas, for many years there has been an increasing influx of Orientals into Canada and especially British Columbia threatening the very livelihood of the Anglo-Saxon on the Pacific Coast.

And whereas, the economic standard of living of such races makes it impossible to compete with